海外出張報告

ヨーネ病に関する日豪ワークショップ

出張期間：平成 22 年 9 月 19 日～ 23 日
出張場所：オーストラリア・ニューサウスウェールズ州カムデン

MORI Yasuyuki
ヨーネ病研究チーム　チーム長　森　康行
MOMOTANI Eiichi
ヨーネ病研究チーム　上席研究員　百溪　英一
KAWAJI Satoko
ヨーネ病研究チーム　研究員　川治　聡子

シドニー大学獣医学部Dr. Richard Whittington主催による、ヨーネ病に関するワークショップ（Joint Workshop on Paratuberculosis Research）が2010年9月21日に、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州カムデンで開催されました。日本とオーストラリアにおけるヨーネ病の発生状況、ヨーネ病防疫体制、ヨーネ病研究の歴史や現在の研究状況を紹介し、討論することがワークショップの目的です。オーストラリア側からは、シドニー大学獣医学部関係者、オーストラリア農林水産省、ニューサウスウェールズ州産業省、オーストラリア家畜衛生協会（Animal Health Australia、AHA）、オーストラリア家畜・精肉協会、オーストラリア肉牛協会、オーストラリア酪農連合、さらにAusVet Animal Health Servicesなど関連の民間企業から総勢34名、動衛研からは川治聡子研究員、百溪英一上席研究員、および森の３名が参加しました。日本側からは、我が国の家畜防疫体制と家畜伝染病予防法（家伝法）に基づいたヨーネ病対策のシステムおよびヨーネ病の発生状況、動衛研におけるヨーネ病研究とその成果、ヨーネ病とクローン病の病理並びにマウスモデルを用いたヒト炎症性腸疾患の研究について発表を行いました。一方、オーストラリア側からは、オーストラリアにおけるヨーネ病の発生状況と防疫体制、ヨーネ病の研究史、ヨーネ病実験感染羊における各種免疫学的・細菌学的検査成績の推移、ヨーネ病に対するワクチン評価などの発表がありました。

オーストラリアでは南東部が主なヨーネ病の発生地域であり、国としてのヨーネ病対策はAHAによって策定されたヨーネ病対策プログラム（National Johne's Disease Control Program、NJDCP）によって進められています。NJDCPには羊、牛、山羊、シカ、アルパカを対象とした対策プログラムがありますが、防疫は主に、ヨーネ病発生地域と清浄地域のゾーン分け、ゾーン間の家畜の移動制限とMarket Assurance Programsと呼ばれる農場のヨーネ病評価システムからなっています。ただし、後者は自主的な防疫システムであるため、全農場が参加している防疫プログラムではありません。これに対して、日本では家伝法により乳牛、肉用繁殖牛等は法律に基づいた検査を行い、摘発・淘汰によりヨーネ病の防疫が進められています。この日本のヨーネ病防疫システムを紹介すると、その厳しさに驚かれますが、日本ではさらに将来的にはヨーネ病遺伝子検査の普及を進めたいとの発表には、オーストラリア側も大変興味を持ったようです。現在日本は牛輸出の相手国としてオーストラリアでは重要視されているため、遺伝子検査を含め我が国のヨーネ病検査手法や検査体制については強い関心を持っていると思いました。また、日本側から行ったヨーネ病とクローン病の病理組織学的な違いやマウスモデルを用いた炎症性腸疾患の研究にも高い関心が示されました。

Whittington教授の研究チームではヨーネ病に関して様々な研究が行われていますが、中でも遺伝子診断法や実験感染動物における免疫応答の解析と診断法の改良は、日本側でも全く同様な研究を行っています。ただ、ヨーネ菌の実験感染に１回30頭以上の牛を用いるという、その使用頭数の多さは日本側としては大変羨ましい限りです。今後、このような共通の目的を達成するために、本ワークショップ開催を機会として、ヨーネ病の研究を国際共同研究へと発展させていきたいと思います。